

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 氏 名：大野 松茂（おおの まつしげ）
- (2) 年 齢：85 歳
- (3) 参加事業：第 4 回日本青年海外派遣事業（東南アジア第 2 班）
（1962 年）
- (4) 職 業：狭山市名誉市民、西武文理大学特命教授、
埼玉県産業教育振興会 会長
一般社団法人 高麗 1 3 0 0 理事長、
埼玉県立川越総合高等学校明星会 会長
元 内閣官房副長官（安倍・福田内閣）、総務副大臣、
自由民主党埼玉県支部連合会 会長



■参加のきっかけ

私は 26 歳の時に日本青年海外派遣事業に参加し、東南アジアなど 9 か国に行かせていただきました。参加のきっかけは、高校を卒業し、青年団の活動に熱心に取り組んでいたところ、**先輩から「青年海外派遣」というものがあるので参加してみないかと勧められて応募しました。**青年団とは、日本全国で町づくりや地域の発展のために活動している団体で、当時の事業参加者は、そういった青年会議所や 4 H クラブ（農業青年クラブ）といった青年団体のリーダーが多かったですね。一般国民、ましてや若い青年が海外に行くなど、ありえない時代でしたので、海外生活に慣れさせるべく、派遣前には様々な研修がありました。例えば、ホテル研修といって、出発前に日本国内の西洋式ホテルに宿泊し、テーブルマナーやベッドの使い方の練習なんてこともしましたよ。研修も大事ですが、テーブルマナー一つとっても、海外の慣れない環境の中、実践することで身につくことも多く、振り返ると、改めて海外派遣事業で多くを学ばせていただきました。そういった派遣前の数々の研修を受講する中で、日々、海外派遣への期待が高まっていました。

■「無駄に物事を見ないように」

派遣前の研修で「この財政厳しき折に皆さんを海外に派遣するのですから、決して、無駄に物事を見ないように。」と指導されたことを覚えています。そのため、派遣先では、視察などのプログラムはもちろん、移動中のバスに乗っている時も必死になって外の景色を見ながら、現地の生活様式などを観察し、見たもの全てを吸収しようと一生懸命になっておりました。そうやって集中して観察していると、民家の軒先に干してある洗濯物が目につきます。干してあるものは非常に質素で暮らしの貧しさを感じさせるもので、**これまで当たり前だと思っていた日本の生活が実は恵まれていたのだということに気づかされました。**「決して、無駄に物事を見ないように」意識すると、確かに目に入るひとつひとつが自分にとって学びになります。そのため、当時の名残で、60 年たった今でもいまだに乗り物に乗っている時に居眠りなんかできませんよ。

■日本を代表するという体験

内閣府（当時総理府）の事業に参加するという点に対して、特別な思いなどはありましたか。

出発前には、派遣先の歴史を含む様々な研修がありましたので、戦後の東南アジアを訪問するわけですから、もしかすると日本人だということで石を投げつけられるのではないかと覚悟すらしていたんです。ところが、私たち派遣団は行く先々

で大歓迎を受け、あちこちで感謝の言葉をいただきました。カンボジアでは「日本のおかげで教育の機会を与えていただいた。」「日本の方々には、数を数えるとか、文字の大切さを教えてくださった」とお礼を言われることさえあったんです。こうした経験を通じて、実は、日本という国は世界で高く評価されていたんだということを初めて知り、これまでの歴史認識が一変しました。**加えて、自分が日本を代表青年として外国の方とやりとりする中で、日本人としての誇りや意識が芽生えたような気がします。**

どの訪問国にもそれぞれ思い出がありますが、カンボジアは熱心な小乗仏教の国で、貧しい中にも明るく、建国の意欲がみなぎっている印象的な国でした。農業関連の視察の際に、日本で使っている農薬について話したところ、虫を殺すことにも抵抗を感じるようでした。そんな心優しいカンボジア人の国でポル・ポト派によって大虐殺が行われ、国の信頼を失ってしまったのは本当に残念なことでした。**政治が安定していなければ、国の発展がないということを痛感し、政治の道を志そうと思った出来事でした。**

これから青年国際交流事業や参加する青年に対しての期待を教えてください。

今の若い方々は、お金さえあれば、世界中どこにでも行けますね。そうした時代にあって、国が実施する国際交流事業に参加する意義は何かというと、それは日本を代表するという経験です。国が送り出してくれるのです。**単なる旅行ではあり得ないような経験ができるからこそ、事業に参加する皆さんには、その重みを改めて自覚し多くを学んできてほしいと思います。**

■ 船内だから体験できたこと

船での移動では、長い時間を仲間とともに過ごしたと思います。その中で得られた特別な経験はありますか。

私たちは、往路はオランダ船テゲルベルグ号に乗船し、復路は飛行機でした。船内では、同じ派遣青年同士の交流はもちろん、たまたま一緒になった乗船客とも交流が持てる貴重な体験で、出発前の研修で学んだ洋式の生活を実践する場でもありました。日本では英語を使う機会はなく、派遣団に参加することが決まってからラジオ英会話を聞いて勉強しましたが、船内で毎日英語に接しているうちに何とか通じるようになっていました。

言語、宗教、文化など全く異なる国の青年たちと触れ合うと、不思議なもので、**日本では見えなかった大切なもの**が見えてきます。

「大切なもの」とは、例えばどんなことでしょうか。

日本の固有の文化や伝統、産業、歴史の尊さと誇りなどです。これらのことを考え、先人に対する感謝の念を厚くしたものです。いろんな国の青年たちが同じ船に乗って生活を共にし、交流することに大きな意義があると思います。

海外派遣を経験して、その後の活動につながっていることはありますか。

日本青年海外派遣事業でカンボジアに派遣されたことをきっかけに、**国会議員になってから「カンボジアに小学校を贈る運動」**をしてきました。カンボジアでは 300 万円程で学校が建てられます。国会議員の有志 30 人が毎月 1 万円ずつを積み立てると、1 年で小学校 1 校を贈ることができるんです。カンボジアに毎年 1 校ずつ、そして、ラオスにも小学校を寄付しました。

また、埼玉県青友会会長の時に埼玉県百年記念事業に関し青少年育成埼玉県民会議の議長（栗原浩知事）から何かアイデアはないかと聞かれましたので、青年の国際交流事業を提言しました。知事に直談判して「青年の翼」という国際青年派遣事業をスタートさせました。最初はヨーロッパに派遣していたんですが、のちに東南アジアに変更しました。青年海外派遣で東南アジアに派遣された影響だと思います。

■ 太いきずなで結ばれて

私の参加した「東南アジア第二班」は帰国後、「ランボン会」という同窓会を結成しました。「ランボン」とはカンボジアの民族舞踊のこと。訪問先の各地の歓迎会で演じられ、私たちも踊りの輪に加わったものです。アンコールワットの「象のテラス」での青年たちとの交流は忘れられません。「ランボン会」が存在する限り、私とカンボジアは太い絆で結ばれているような気がしています。

青年海外派遣という貴重な体験によって培われた「地域を愛する思い」があったからこそ、これまで埼玉県議会議員、狭山市長、衆議院議員という重責を皆さんが私に委ねてくださったのだと思います。今日の私の原点は、若い時に東南アジア諸国を訪問する機会を与えていただいたことにあります。

派遣同期の方との現在に続く交流について教えてください。

最近は、みんな高齢になっているから会っていないですね。

大野松茂氏プロフィール

狭山市の専業農家の長男として生まれる。都市農業・酪農・施設園芸などに組みつつ、青少年活動のリーダーとして活躍。38歳で市立中央公民館館長、後に狭山市PTA連合会会長を経て、県議会議員（2期）、狭山市長（2期）を務める。平成8年10月衆議院議員初当選。平成13年1月財務大臣政務官、平成14年10月文部科学大臣政務官、平成17年9月衆議院災害対策特別委員長、平成18年9月総務副大臣、平成19年8月～平成20年8月内閣官房副長官。

地域の青少年団体での正義感・使命感が政治参加への原点となる。生涯学習・地域福祉・コミュニティづくりをはじめとする、地域に根差したボランティア活動を通しての様々な体験と、総理府青年海外派遣団員として東南アジア諸国を親善訪問し、その中で「世界の中の日本」を認識。政治への志を高めた。